朝日新聞 2023年(令和5年)1月21日(土)



1980年代は毎年20万、30万匹の猫が殺処分されていたが、2020年度には約2万匹まで減った。「あと一息。だけど、あと一息からが難しい。動物保護団体はパンクしそうなところもある」と山口武雄さん（中央）＝福岡県みやま市

野良猫を減らす活動40年

獣医師　山口（やまぐち）　武雄（たけお）さん（75歳）

福岡県みやま市に設けられた動物病院に昨年12月上旬の早朝、捕獲器に入れられた野良猫が次々と集まってきた。ボランティアらが雌雄の別や体重を確認し、麻酔をかけたうえで、不妊・去勢手術のため手術台へと運ぶ。

最初はキジトラ柄の雌猫。メスを手に、さっとおなかを切る。「傷口は小さく」。優しいまなざしで手元を見つめながら、つぶやく。手術の翌日には元いた場所に放つから、開腹幅は1センチ程度にとどめるようにしている。鉗子（かんし）や子宮つり出し鈎（こう）を自在に操り、最後は抜糸が不要な吸収糸でおなかをとじる。その間、10分足らず。雄なら1分もかからない。技術を習得しようと教えを請う獣医師は後を絶たない。

元は神奈川県で動物病院を経営する普通の獣医師だった。大学卒業後、1974年に開業。「動物愛護精神なんてなかった。食っていくのに必死だった」。きっかけは、病院を開いて約10年が経った頃に出会った一匹の野良猫。骨盤が折れ、胎児が死んでいた。手術して助け、飼い猫にした。「野良猫の一生は本当に過酷。妊娠中でもエサを求めてさまよわないといけない。一生懸命に子育てしていても、人間に捕まれば殺処分されちゃう」

不妊・去勢手術をすれば猫はおとなしくなり、人間社会でも共生しやすくなる。1代限りの生を全うしてもらいつつ、子猫が生まれることはなくなるから野良猫は減る。まず、野良猫の手術を5千円で引き受け始めた。当時でも麻酔料や入院費を除いた手術料だけで雄は1万数千円、雌なら3万円近く取るのが一般的。破格の設定だった。

同じ頃、動物保護団体から相談されて出張手術も手がけるようになった。野良猫たちがいる場所に出向いて手術することで、より多くの数をこなせるからだ。捕獲（Trap）し、不妊・去勢手術（Neuter）をして元いた場所に戻す（Return）。野良猫を助ける取り組みのなかでも「TNR」と呼ばれる活動に没頭した。

それから約40年、保護団体のボランティアだけでなく、行政職員や獣医師ら動物愛護活動に携わる多くの関係者から尊敬を集める存在になった。病院経営から引退した今も全国各地を巡り、野良猫の手術にあたっている。その数は年間5千匹以上にのぼる。

取材したこの日は約6時間、手術台に立ち続けた。手術した猫は約40匹。「僕のやっていることは、猫を幸せにはしない。でも不幸な猫は、確実に減らしていける。持っている力をそのために使い切りたい」。福岡に3日滞在後、宮崎へ向かった。手術の予定は数カ月先まで詰まっている。

文・太田匡彦　写真・藤脇正真

◀3面に続く

ご意見・ご感想はbe@asahi.com